

# 穂別の化石を「むかわ竜」とするのを正す

ニュース  
第3号

|| 何故「むかわ竜」の名は正されなければならぬのか ||

化石は、人類が登場する以前の歴史—日本や北海道がどのようになつて造られてきたかを解明する貴重な財産です。ですから、化石がどの地から発掘されたのかは、化石を考えるうえでの基本中の基本です。「むかわ竜」と聞いた人は、普通に考えると「『むかわ』で発掘された化石」と思います。私たちが署名で話していくても、むかわ町から50km位の恵庭市の人でさえ、「鶴川本町で発掘された化石だと思っていた」と言います。

## 正さなければならぬ理由1

「むかわ」は「化石の里ほべつ」とはまったく異なる地です

まず、気候から見てみましょう。

先に述べたように、天気予報で「むかわ」と「むかわ穂別」は別になつていますが、この起源は54年前の穂別の取り組みにさかのぼります。穂別の気候を観測する正式な観測所は戦後になつてもありませんでした。そこで、町は、「山間盆地との特殊な立地条件にある穂別の気象を正しく知ることは農作業をはじめ各種産業振興や、風水害防止等のために必要」として、1963年に、穂別中学校庭に簡易气象観測所を設けました。観測は同校の先生と生徒による観測班が、気象台認定の観測器材を使い、毎日午前九時に、気温、雨量、温度、地中温度、日照、風向、風力を観測し、公認発表として、役場正面玄関の告知板に掲示し、町民にも知らせました。このことが今も引き継がれているのです。このように、穂別の気候は独特のものです。ですから、基幹産業も穂別は農業と森林ですが、「むかわ」は農業と漁業で、主要な農産物も穂別と「むかわ」では違います。

では、地層はどうでしょうか。

「むかわ」の地層は、新第三紀後期から第四紀にかけての軽舞層と萌別層と言われる約1千万年前以後の地層です。出てくる化石は、大きくとも5ミリメートル位の小型有孔虫化石が多く、恐竜の化石とは無縁です。

穂別の地層は、白亜系と言われ、白亜紀の中期から後期にかけての函淵層群や蝦夷層群等の幅広い地層からなっています。今年9月に道の天然記念物に指定されたホベツアラカリュウは蝦夷層群、ウミガメの化石は函淵層群です。「むかわ竜」とされているハドロサウルス科の恐竜化石は7200万年前の地層で見つかったものです。このように、地層も「むかわ」と穂別ではまったく異なります。

さらに重要なのは、穂別の地が世界の化石研究の宝庫として貴重なことです。

長頸竜研究を専門とし、今回の恐竜化石発見のきっかけをつくった佐藤たまき東京学芸大学准教授は、「穂別は、特定の年代だけでなく、幅広い年代の化石が出ており、生物の生態系解明調査に重要な土地」と言つてます。実際に、日本の化石研究は、1800年代末から始まり、北海道の化石研究は、開拓史の招きで来道したアメリカのライマン博士が1872～75年に地質調査を行つたのが初めてですが、1903年には穂別の新種の化石が報告されています。また、今度の恐竜は陸棲の大型爬虫類ですが、前記のホベツアラカリュウは海棲爬虫類で、海棲と陸棲の大型化石が発掘されることも穂別の貴重な特徴です。「むかわ竜」の名は、このような「世界の化石研究の宝庫の地」—穂別への関心とロマンを伝える名ではありません。

署名は10月末迄に740筆集りました。

道内の30市町と道外の13都府県から寄せられています。

署名は1月末に旨意の集約をします。未完の署名は1月30日迄に差し替えてください。

集約結果は12月15日付けニュースで紹介します。  
毎月末の集約ですので3回目の集約は12月末です。

【裏面もご覧下さい】



ます。NHKが毎日放映する天気予報でも、「むかわ」と「むかわ町」と言った場合は穂別も含みますが、「むかわ」と言うと、「むかわ」(旧鶴川町)で発掘された化石」と思われる、「むかわ竜」思われてしまうのです。ここに、「むかわ竜」とするのを正さなければならぬ問題の一つがあります。

町外から化石の里ほべつを応援する穂別出身者の会（略称：化石の里ほべつを応援する会）

2017年11月15日  
連絡先：FAX 011-385-8368 田中弓夫

## 正さなければならぬ理由2

前述した「化石の宝庫穂別」は、自動的に「化石の里ほべつ」として輝いたのではありません。「化石の里ほべつ」がつくられるには、穂別の住民と行政の「文化と科学に対する深い造詣」と、「一体となつて進めてきたまちづくりの努力」がありました。

化石の研究は古生物学と言われ地質学者が専門的に行います

「それでは、「化石の宝庫穂別」はどのようにして、光り輝く「化石の里ほべつ」として、日の目を見たのでしょうか」

発端は、横山正明村政の誕生！文化と教育重視の村政が化石への熱意と愛着を育んだ

「化石の里ほべつ」への出発は、1947年の横山正明初代民選村長の誕生に始まります。産業の中心が零細農業で、電気もなく、毎年のように洪水に襲われていた故郷の穂別に、道庁職員を辞めて戻った横山正明氏は、「治水事業と発電所建設で村を豊に」「公民館建設や文化協会設立などで地域の文化活動を活発に」など、「美しい穂別をつくる」との理想を掲げ、「村づくりの第一歩は人づくりから」と、高校の開校に取り組みます。当時、北海道の177村で村立の高校は17校でした。穂別高校は、1951年に校長を含む4人の正教員に他校の教員が非常勤講師として援助する最少限の体制で、校舎も穂別中学

が輝かせた先人と地域の熱意と努力につながる名ではありません

が、他の分野の学問と違つて、アマチュアの人達が新発見に貢献することが多いのが特徴です。それだけ地域の役割が大きいのです。  
校の2室を間借りして開校。北島済初代校長は、「クラブ活動を盛んに」と、その一つに「村の地質時代の研究と化石の採取」をあげています。高校の教師が生徒を誘つて「化石が出そうな地域に行つて発掘を試みた」との話しが日常的におこなわれ、郷土史研究会もつくられます。これが、町民の化石への熱意と愛着を育んでゆき、村にも化石研究会がつくられます。

呼びかけ人の水野佐多子氏は、「1966年に苦小牧から転居したとき、多くの方々の家に化石が飾つてあつたことを想い出します」と当時の印象を話しています。



日本に輝く「化石の里ほべつ」へ

この取り組みは1970年代後半になつて一気に実り始めます。1975年に荒木新太郎氏が長頸竜化石を発見すると、町は教育委員会を中心に発掘調査団を結成し、臨時町議会で補正予算を組み、77年に4日間の発掘調査を行い、直ちにクリーニングして、78年春から一般公開をおこないました。このことが、町外にも「穂別の化石」を一気に広げます。町内の化石発掘も更に熱を帯び、76年に黒崎満氏、77年に笠巻袈裟男氏が長頸竜ノジユールを発掘。77年には煤孫三弘氏が平丘で、阿部利春氏が富内でともにカメ化石を発掘。翌78年には河野哲氏含む5人が富内でデスマスチルス、79年に菅原昭二氏が鯨、80年に石崎正行氏と荒木新太郎氏がウミガメ、中条太光氏がモササウルス、81年には佐藤博義氏が長頸竜、中村敏子氏が鯨と次々に化石や

ノジユールを発掘します。これらの方々は、アマチュアの愛好家で、発掘した化石には示準化石となつているものもあります。愛好家と住民の化石への愛着と情熱が、行政と一体になつて「化石の里ほべつ」として輝かせる方向に大きく広がつていきました。

呼びかけ人の岳蓉子氏は、お兄さん（野見良治氏）が参加していたまちづくり団体「カラマツ青年隊」の人たちが、岳さんの家に集つて、夜遅くまで化石をデザインした木工民芸品をつくつている様子を報道した1980年代の北海道新聞の記事を今も大切にしています。

\*ノジユールは珪酸や炭酸塩が化石等を核に凝集した岩石の塊  
\*示準化石は、地層の年代を決定する指標になる化石

町立博物館の建設で、町外からの研究者や愛好家が集る「化石の里ほべつ」に

このようなか、町は1980年に博物館建設計画検討委員会を設け、1982年に全国でも珍しい化石専門の博物館を建設します。この博物館建設が決まるとき、札幌市の長岡静男氏、苫小牧市の三浦清氏、三笠市の国分博治氏、平取町の鳴原崇之氏、上川町の金子由三氏など町外の愛好家が次々と採取した化石やノジユールを穂別の博物館や教育委員会に寄贈するなど「化石の里ほべつ」は、化石研究の貴重な地として全国で認められ、国

「森と化石とロマンの里」づくりへ穂別に入ると化石と太古のロマンが漂う町に

1990年代に入ると、「森と化石とロマ

ンの里づくり」計画が進みます。

1991年には、本通りの約1kmを「進化の道」と命名し、クビナガリュウとモササウルス、アンモナイトの模型を乗せた照明が街路灯になり、両側歩道には、「地球の誕生」と「海の生命」、「陸の生命」、「人類の歴史」、「穂別のまちづくり」の5つのゾーンを設定し、地球の進化を学べるようにしました。また、街路樹は、生

今度の恐竜化石の発表によつて、「化石の里ほべつ」は、「日本の化石研究の宝庫」から「世界の化石研究の宝庫」になりました。

しかし、「むかわ竜」の名からは、このような偉業を果たした穂別の先人と地域住民、行政、多くの研究者と愛好家の「敬意と祝福」の気持ちや、穂別を「大切にし、伝える」思いは伝わつて来ません。正さなければならぬ2つ目の問題点はここにあります。